

流れを読む

速まる歴史の流れ

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

アメリカの学者の次のような主張に接して、急速に進む世界の流れの変化と、日本はまた遅れてしまったという感を深くした。

「アメリカはサウジアラビアへの石油依存をやめるべきだ。サウジ王国はイスラム原理主義者を支援している。彼らは九月十一日の同時多発テロを含めて、過去七年間で何回にもわたってアメリカを攻撃して来ている。替わってロシアの石油生産を援助すべきである。本年中に世界一の石油生産国になるだろうし、アメリカがパイプライン投資や港湾などの輸送インフラ整備支援を強化すれば、十年から二十年くらいで、五〇%以上の生産増加を可能にする事が出来る。」

第一に考えるべきは、時代の流れが速まってきた事である。イデオロギーによる東西冷戦が終わったと思っただけで、グローバルイズムという「市場原理」が支配した。それがまた変化して、「国家による国益追求の時代」に入った。底流として変化が進んでいたから、九月十一日の「テロ」の引き金効果が大きくなったと考えられる。テロ後のブーチン大統領の素早い動きもこうして理解出来る。それに対応するようにアメリカの知性が、ロシアという「昨日の敵」の石油生産を支援すべし

という主張につながる。我々は歴史の流れの変化と、急速化から目を離す事が出来ない。

第二は、経済のグローバル化で「国家」の役割は低下していくと考えた事は間違いであった。国境を超えた経済活動が進んでいけばいくほど、国民の生活と安全を守るための国家の役割は増大する。しかしその解決すべき課題はますます複雑となり、かつ難しくなる。それに対処するためには、正確な判断力と大胆な実行力が必要である。広い意味の政治の高度化こそが、今求められている。

第三にアメリカは、ヘゲモニー国家時代に入って世界帝国への戦略を探り始めた。対外債務が二兆ドルを超え、なお年間三千億ドル以上の赤字が累増し、それをドルの過剰発行によって賄ってきたアメリカは、「ドル」を世界通貨にする事によって、逆に世界支配への武器に変えようとしている。アメリカへの投資は最も魅力的であり、そしてアメリカからの投資を受け入れない国は豊かになれないという循環を作り上げようとする壮大な戦略である。ラテンアメリカ、東南アジア、韓国でやった事を、今度はロシアで実行しようとしている。

こうした世界の流れに対して、わが

日本はどう対処していくべきだろうか。国益が強く衝突し合う時代には、日本の国家意識を高めていかなければ生き残れない。経済的繁栄の中で希薄化された「日本国家」は、グローバル化で一層影を薄めた。しかし世界の流れは変わった。まず「国家」と「政府」を峻別しなければならぬ。現在の国家危機を救うために政府を作り変えるのだ。最近目立つ政治家や官僚などの不祥事は目に余る。こうした不祥事を生み出す政府を断固改革する政治のあり方を探っていくかなければならない。そして十年後の「日本国家」のあるべきビジョンを明確化し、それを実現する具体的戦略を国民的コンセンサスに基づいて早急に作り上げていく事である。あるべきビジョンは、東京一極集中が行き詰まったのだから地方政治強化の方向である。地域繁栄への道は、地域の人々にしか分からない。地域の社会福祉、環境問題、公共事業などのあり方は中央官庁では把握出来ない事がはつきりした。二十世紀の日本は、いろんな地域が独自の繁栄を築き上げ、それぞれが切磋琢磨する事によって展望が開けてくる。そうした地方政府の連合体としての日本は再び活力溢れる国家となる。